

地 教 史 学 通 信	第 153 号 2021 年 6 月 30 日 全国地方教育史学会
--------------------	--

いよいよ本格的な夏が到来する季節となりました。会員の皆さまにおかれては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年度の第 44 回大会は、三上敦史会員のご尽力により資料見学会・研究発表を北海道札幌市で計画しておりました。しかしながらコロナ禍の影響を受けて現地開催を断念、研究発表等のみオンライン開催となりました。当日は、多くの皆さまのご協力・ご参加をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。今号はその大会参加記を含む大会全体の報告と事務局からの諸連絡をお伝えします。

I. 大会報告

全国地方教育史学会第 44 回大会記

三上敦史（北海道教育大学）

2021 年 5 月 30 日（日）、第 44 回大会のうち研究発表・シンポジウム・総会のみですが、当学会としては初のオンライン開催を行いました。

当初は 29 日（土）に北海道立文書館・北海道立図書館北方資料室の複合施設での史料見学会を、30 日は札幌市男女共同参画センター（エルプラザ）での現地開催を予定しており、さらに 30 日については現地・オンラインのハイブリッド開催を目指したのですが、5 月 9 日（日）～31 日（月）の間、札幌市が「まん延防止等重点措置」の対象地域となるに及んでエルプラザは臨時休館となり、万事休す。オンライン開催に切り替えました。なお、5 月 16 日（日）から北海道が「緊急事態宣言」の対象地域に加えられ、それが 9 都道府県一斉に 6 月 20 日まで延長となるに及び、史料見学会を予定していた 5 月 29 日からは複合施設も追加で臨時休館となりました。

実を申しますと昨年未の段階で、本大会を開催する目途は全く立っておりませんでした。医学・工学のように大規模な学会であれば、大都市で大会議場などを借用するため問題ありません。昨年度の第 43 回大会（甲南女子大学）の中止も同様でしたが、コロナ禍の影響で大学施設が借用できないことが中小（すなわち文系はほとんど）の学会にとっては大会開催の大きなネックとなります。第 43～45 回大会までの内諾を得ていた大学はいずれも施設使用不可、幹事会メンバーの所属大学も同様でした。

そこで一計を案じ、大会校を探すのは断念し、事務局が承引して社会教育施設での開催を試みたのが今回の第 44 回大会でした。マイクロ学会ゆえ、大会議室を借用すれば参加者を全員収容できるというのがポイントです。エルプラザに使用団体登録をし、事前申込みをし、抽選に当選し…、というところまでは順調に進んでおりました。また、複合施設には教養時代の語学クラスの同級生だった専門職員（専門は日本史学）がおり、久しぶりに連絡をとって史料見学会に快諾を得ておりました。

そうした会場確保と並行して、注視していたのは医系の学会の開催状況でした。昨年度についても同様でしたが、誰よりも新しく、また深い情報を手にしているはずの医学者たちがどういう動きをするかが何よりも重要な指標になるであろうことは言を俟ちません（厚生労働省・国立感染症研究所・大学病院・日本医師会などの飲み会が社会的批判を浴びていますが、逆に「その程度」の病気なのだという理解もできると思っております）。昨年度の第 43 回大会の中止判断をした頃、医系の学会が片っ端から中止を決めていたことが

決定打となりました。その後、昨秋以降は軒並みハイブリッド開催です。特に日本感染症学会が5月7日(金)～9日(日)に横浜国際平和会議場(パシフィコ横浜)とオンラインでハイブリッド開催されました。今をときめく?感染症学の専門家たちが現地開催を恐れていない、この事実は大変心強く感じたものでした。

然るにこの急展開です。GW前から始まった、「インド株」と称される新型コロナウイルス感染症の変異株の急拡大は、専門家たちでも予想のつかないだったのでありましょう。それを思えば、肝心の史料見学会が開催できず、また近接学会に一石を投じることもできなかったことは残念至極ではありますが、ま、しゃーないか…という気分でおります。

また、一応は2年ぶりに学会として最低限の責務の一つである大会開催ができ、研究発表・シンポジウム・総会のZoom会議へはコンスタントに30名以上の会員の皆さまがご参加になったわけで、開催業務を担った事務局としては安堵しております。特に業務ご多端の中、わざわざシンポジウムにお越し下さり、専門的な知見を提供して下さった田中智子先生(京都大学、非会員)には心より感謝申し上げます。また、同じくシンポジウムでご発表をいただいた井上高聡・吉川卓治、メール・Zoomのみでシンポジウムを構築して下さった担当幹事の吉野剛弘、不首尾に終わりましたがハイブリッド開催でオンライン関係をご承引下さっていた久保田英助の4会員にも御礼申し上げたいと思います。

来年度の第45回大会は、是非とも現地開催ができてるように、その前段階として全国の大学のキャンパスに若者たちの明るい声が響いているようにと祈って止みません。

【大会参加記】

学会を開催して下さった事務局等関係者の皆様に深謝したい

菅原亮芳(高崎商科大学)

学会を開催して下さった事務局等関係者の皆様に深謝したい

菅原亮芳(高崎商科大学)

悲痛な葉書(2021年5月13日付)が届いた。全国地方教育史学会事務局 三上敦史(北海道教育大学)の名で、「現地開催を断念」、「初日の史料見学会については全日程を中止」、5月30日のみ「リモート会議用ソフト・Zoomを使用して実施」と書いてあった。筆者はZoom開催を心配した。しかし杞憂であった。全国から多くの会員が集い、学会は始まった(発表者のレジュメ・発表原稿などの配付資料は事前に送付していただいた)。

オンラインによる研究発表。斯くも「雑誌メディア」が近現代日本教育史研究の主要素材となっているとは驚いた。小宮山会員は「郷友会雑誌」を、木村会員は「郷土雑誌」を、そして田中会員は少年向け雑誌をそれぞれ取り扱った。発表の梗概を配付資料とご発表等をもとに筆者なりに要約すれば、小宮山会員は「若者たちの精神的支柱」という角度からの丹念な『久徴館同窓会雑誌』の書誌的研究であった(出所:「全国地方教育史学会第44回大会 加能越三州の学生寄宿舎『久徴館』及びその同窓会組織に関する考察 小宮山道夫(広島大学)」より)。木村会員の研究はメディアの限界をpushしつつ、明治期の中等教育機関の「連合運動会」という窓から地域(本発表は新潟県)の中学校の特質と役割を見事に描いて見せてくれた(出所:「明治期新潟県における中等学校の連合運動会」木村政伸(九州大学)より)。田中会員はこれまでのご自身の「雑誌」史研究を基盤とし、戦前と戦後とを比較しつつ昭和戦後少年雑誌の読者層を検討した(出所:「光文社刊行雑誌『少年』に関する考察—戦後の日本の子ども読者像の形成をめぐる—」全国地方教育史学会第44回(2021年度)大会…田中 卓也(静岡産業大学)」より)。彼は戦前と戦後ではメディアと読者とのコミュニケーション機能に変化が見られた、と指摘した。

シンポジウム。吉野会員による発題。「はたして高等・専門教育機関は、地域にとってどの程度の意味を有

するものなのか」(「第 44 回全国地方教育史学会大会 シンポジウム「高等・専門教育機関と地域社会」趣旨 吉野剛弘(埼玉学園大学)」より)。井上会員と田中智子氏(京都大学)が登壇した。井上会員の実証性の高い精緻で完結した歴史的研究には圧倒された。井上会員は「札幌農学校の官員養成機能」(出所:「札幌農学校の官員養成と北海道」井上高聡(北海道大学大学文書館)、1 頁)の変化過程を実証した。一方この研究分野の第一人者、田中氏はレジュメ「小括」★岡山県という地域にとっての意味～官立校をなにゆえ欲したのか」(出所:「全国地方教育史学会第 44 回シンポジウム 高等・専門教育機関と地域社会 提案 2 明治期における専門・高等教育機関設置地としての岡山―地域利益の段階的変容― 2021.5.30 田中智子」、3 頁)に「②卒業生が培った知識・能力を地元に戻元」、「⑤拠点としての地域的威信の上昇」、「一種のパラドクス」であると記した。指定討論者吉川会員は今後の「高等・専門教育機関と地域社会」に関する歴史的研究の視座を「地方教育史研究・地域教育史研究では、各学校の『地域』の個性を明らかにするとともに、さらに学校が提供する『知』(教科課程やそれを支える学問)の内実や質の検討に踏み込むことで、そこから『地域』とのかかわりを議論することができるのではないか」(出所:「全国地方教育史学会第 44 回シンポジウム『高等・専門教育機関と地域社会』コメント 2021.05.30 吉川卓治(名古屋大学)」、1 頁)と描画した。研究展望の可能性を示唆した頗る重要な指摘であるが故に、少し長いが敢えて引用させていただいた。この研究領域に不案内な筆者ではあるが、「地域」をどのように定義するのが問われていると感得した。何れのご研究も、ご発表も、コロナ禍において資料探索や研究交流などがままならない状況下、精力的になされたことに、筆者は敬意を表したい。

さらに、声を大にして事務局の皆様のご苦勞に感謝したい。2021 年度大会も、荒井会長のリーダーシップのもとに事務局の皆様のご尽力のもとに実行できた。心より感謝する。三上事務局長は退任し、須田会員が就任とうかがった。三上会員に万謝、須田会員に拝謝。皆様のご健康を祈念する。

第 44 回大会に参加して

雨宮 和輝(早稲田大学・非常勤)

2021 年 5 月 30 日(日)に、全国地方教育史学会第 44 回大会が開催された。今回の大会は札幌の現地開催が予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、Zoom を使用したオンラインでの開催となった。

午前の部は、小宮山道夫会員、木村政伸会員、田中卓也会員の発表であった。各会員の発表とも、Zoom の共有機能を使った発表となった。各会員の発表に対して質問がある場合、参加者は自身の画面表示、音声機能をオンにして質問をする形式であった。各会員の発表も、それに対する質問もスムーズに進み、充実した時間となった。

そして、午後の部であるシンポジウムは、吉野剛弘会員の司会で進行し、こちらも資料を Zoom にて共有しながらの進行となった。シンポジストによる報告は井上高聡会員「札幌農学校の官員養成と北海道」と田中智子先生「明治期における専門・高等教育機関設置地としての岡山 ―地域利益の段階的変容―」であった。

まず、井上会員の報告は札幌農学校の開拓事業を中心とした官員養成に関するものであり、内村鑑三や新渡戸稲造といった一部の著名人によって形成された札幌農学校の従来イメージとは異なる実態を報告するものだった。そして、指定討論者の吉川卓治会員が金子堅太郎に批判されるほどの官員養成の「高尚」さが「知」の汎用性を高めたことで「開拓」のために養成された専門技術者が北海道外に流出する可能性を広げ

る条件となり、結果的に開拓事業以外の「異業種」にも就職していくようになったのではないかと指摘していたのが印象的であった。このような札幌農学校における人材養成の問題は、高等・専門教育機関は、地域に対して還元できるような人材の養成を行っていくのか、あるいは、高等・専門教育機関として、地域外でも活躍する人材を養成していくのか、地域に所在した高等・専門教育機関が抱える問題を提起していると言える。

そして、田中先生の岡山を事例とした第三高等中学校医学部設置問題と、第六高等学校問題に関する報告であった。吉野会員の趣旨説明でも言及されていたが、高等・専門教育機関が設置された地域とどのように関係性を構築していくのかは大きな課題であり、地域とまったく結びつかない「空中庭園」となる可能性もはらんでいるのである。高等・専門教育機関が設立された地域に対して、卒業生や就職状況の面でどのような恩恵をもたらすのか、高等・専門教育機関と地域の関係性はどのようなものであるべきなのかということについて、今後の地方教育史研究において重要なテーマになっていくのではないかと考えさせられるシンポジウム報告であった。

今回の「高等・専門教育機関と地域社会」というテーマでのシンポジウムを聞いて、筆者も以前地方教育史学会で一度発表した際に、高等教育や専門教育の中に地方教育史的特質をどのように見出すのかというのが大きな課題であると感じたことを思い起こした。自身は大正期の大学昇格を研究対象としているが、広汎・普遍的な知識を授ける大学教育では、地域への還元を行うのは困難であり、その中に「地域」概念を見出すのは難しいように考えられる。その一方で設置された地域ごとに、土地柄や教授者、学習者の教育環境によっては、各地域において差異は少なからず発生し得るものであり、その差異こそが、高等・専門教育機関の中に見出すことのできる地方教育史的特質とも言えるのではないかと。

今大会はオンラインでの開催となったが、司会を担当された先生方のスムーズな進行により、参加者も発表・シンポジウムを快適に視聴することができた。改めて、オンラインでの開催準備に関わった諸先生方に感謝を申し上げたい。ただ、コロナの影響がなければ、札幌にて、資料見学会も開催することができ、シンポジウムのテーマでもある地域と高等・専門教育機関との関係を実際に見学する良い機会となったであろうことを考えると、非常に残念である。また、懇親会も開催できなかったために、多くの先生方と直接お会いすることもできなかった。オンライン開催は遠隔地からも参加できるという大きな利点はあるが、個人的には従来のような対面での学会が開催できる日常が戻ってきてくれることを願うばかりである。

【総会報告】(三上記)

〔1〕事務局長の交代について

報告事項として、本大会を以て事務局長を交代することが確認されました。

円滑な業務遂行のため、会長と事務局長は1年のスパンにおいて交替する慣例となっています。昨年度、吉川会長から荒井会長に交代した際、次期事務局長は須田幹事を以て充てることが決定しており、今回、そのタイミングを迎えたということです。

私が事務局をお預かりした4年間は、さまざまなミスで会員からお叱りを頂戴することもありました。コロナのせいと言い訳できるのは最後の1年少々のみ、緻密な事務作業が苦手なためにご迷惑をおかけした皆さまには、この場を借りてお詫び申し上げます。なお、後任の須田事務局長は再び緻密な作業ができる方ですので、どうぞご安心下さい(偽りなき本心ではありますが、同時に軽くプレッシャーを…)。

〔2〕来年度の大会校について

コロナ禍の動静次第ですので、全く見通しが立ちません。しかし、方向性としては以下の2つに絞られるかと。

①2020年度の第43回大会（甲南女子大学）は中止に追い込まれましたが、大会校の軽部勝一郎会員からはコロナ収束後に大学施設が借用できるようになれば改めてご承引いただけるとの有り難いご意向をうかがっております。

②今年度同様、大学施設は借用不可、社会教育施設は借用可という情勢であれば、再度、「エルプラザ+北海道立文書館・北海道立図書館北方資料室」という設定もあり得るでしょう。また、今年度、もう一つの候補として幹事会上がっていたのは「愛知県女性総合センター（ウィルあいち）+博物館明治村」。その他、大会開催のための妙案をお持ちの会員がいらっしゃれば是非ご教示を賜りたいと思います。

III. 諸連絡

【入会・退会・異動】（2021年6月30日現在・敬称略）

・異動：藤田薫（赤坂無形文化振興会）

IV. 事務局より

【会費納入について】

会費の納入をお願いします。今回の通信に金額入り（¥4,000）の振込用紙が入っている方は昨年度までの会費納入が終了しておりますので、2021（令和3）年度分を納入して下さい。金額なしの振込用紙が入っている方は未納分がありますので、封入したメモをご覧ください、未納分も納入して下さい。入金された旨、ゆうちょ銀行から連絡がありましたら、速やかに当該年度の『地方教育史研究』を発送します。

全国地方教育史学会 事務局

〒112-8606 東京都文京区白山5丁目28-20 東洋大学文学部教育学科 須田将司 研究室内

TEL/FAX 03-3945-7378

E-mail suda@toyo.jp

公式HP <https://w3.waseda.jp/assoc-zckyoiuku/>
